

# 教職支援センター ニュースレター

## 巻頭言

### 【授業研究】

私は、大学教員になる前、27年半、聾学校の教員をしていました。聾学校とは聴覚障害のある子どもを対象とした特別支援学校のことです。27年のうち前半は幼稚部の学級担任、後半は教育相談やコーディネーターのような仕事をしていました。

幼稚部の学級担任だった頃は、同僚たちと授業研究をする日々でした。お互いの授業を見合っ  
て意見や感想を言い合ったり、授業をビデオに録画し、それをお互いに見合うようなこともしました。それから、教育工学的手法に基づいた授業分析も何度か経験しました。例えば、録画した授業を書き起こして逐語録をつくり、コミュニケーションのかたまり毎にフレームに分け、授業中の教師の発信や行動、子どもの反応などを細かく検討するという方法です。そこでは、コミュニケーションの発達が進むと、自発的な子ども同士のやり取りが増え、それが連続的になることが明らかになりました。そこから、質問-応答といったワンパターンの言語活動ではなく、如何に思考を深めるような発問を行い、子どもの表現に対して会話をつなげるような応答をしていくかということが授業の中で重要な教師のかかわりになるということが分かりました。

また、授業の展開には、大きく二つの形があるということも見えてきました。一つは、教師が強くりードして展開を引っ張る形で、もう一つは、子どもの発信や反応を受け止め、子どもに主導権を持たせるという形です。良い授業は、この二つがバランス良く組み込まれています。子どもに主導権を持たせると思わぬ方向に展開が流れることがあります。教師に余裕がなく、あらかじめ立てた指導案通りに展開することに固執していると、すぐに軌道修正しようとしてしまうため、せっかく自発的で主体的になりかけていた子どもたちの思考が中断されてしまいます。しかし、指導案を作成したときには想定していなかったような子どもの思考や表現は、本来、感動的なことです。子どもが今、何を言いたがっているのか、今、何に心を動かされているのかは、常に大切にしなければならないということも授業分析の中からたくさん学べました。

私は、今、いろいろな学校に出向き、実際の授業を通して教員研修のお手伝いをする機会が多くあります。たくさんの授業を見せていただきますが、指導案通りに一見うまく展開しているような授業よりも、子どもの発言をたくさん受け止めた結果、計画していたことの半分くらいしか進められなかった授業の方が遙かに良い授業だと感じます。教師になったばかりの若い教員も多くいますが、できるだけ、その教員の良いところを見つけ出し、そこを起点により高い専門的なスキルを身につけていってほしいと強く思います。歯の浮いたような褒め言葉は一切使いませんが、見せていただいた授業を頭ごなしに否定することもしないようになっています。同じ学校に何度か継続して通って授業を見せていただくと、子どもたちの成長だけでなく、教師たちの変化も見えてくるといことがとても嬉しく思います。



聾学校幼稚部での言語指導の場面(平成4年頃)



# シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年以上が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

## ～ vol.15 平成30年度卒業生編



文化学園長野高等学校 数学科教諭

### 森 美優 先生

理学部数学科 平成30年度卒業



私は高校2年生後半まで将来やりたいことがなく、なんとなく大学に進学して就職するのだらうなと思っていました。しかし、当時の数学担当の先生に「教師に向いている」と言われたこともあり数学教員になることを目指して理学部数学科に進学しました。教職課程を履修し

ているときは、教師はとても大変な職業で部活の顧問に就くと休みも少ないので私にできるのかという不安もありました。しかし今ではそのような不安はなく、生徒と関わる日々を楽しく思っています。

現在私は、文化学園長野高校で2年生の担任と女子ソフトボール部の顧問をしています。特に部活動には力を入れていて高校時代にソフトボール部に所属していましたが、当時よりもソフトボールという競技に真剣に向き合って日々活動をしています。今はコロナ禍で遠征は少ないですが、最初の頃は練習の厳しさと遠征の多さに驚きました。特に選手たちの練習に向き合う姿勢には感銘を受けました。高校生活の2年半をソフトボールと向き合い立ち向かう選手たちを見て、私も真剣に向き合い成長していかなければならないと思いました。部活動に関わっていると2年半という時間はとても短くあっという間に過ぎてしまうものであると改めて感じさせられます。その短い期間で選手たちが成長していく様子を間近で見られたときが、教師になってよかったと思う瞬間です。顧問というプレッシャーはありますが、大学時代の不安も無くなるほどやりがいを感じています。

授業でもやりがいを感じる瞬間があります。授業準備で予習をしていると、この部分は生徒たちが躓きやすいところではないか、ここはこのように説明するとわかりやすいのではないかなど授業を受けている生徒の顔と反応が想像できるようになってきます。想像通りでないときや一度の説明で理解してもらえなかったときに、とっさに出した例などで「わかった!」と言ってもらった時が一番嬉しいです。生徒一人一人の理解に至るポイントが違うので、そのポイントを探りながら質問に答えるのは楽しいしやりがいを感じます。

日々成長を続ける生徒たちに負けないようにこれからも精進し続けます。

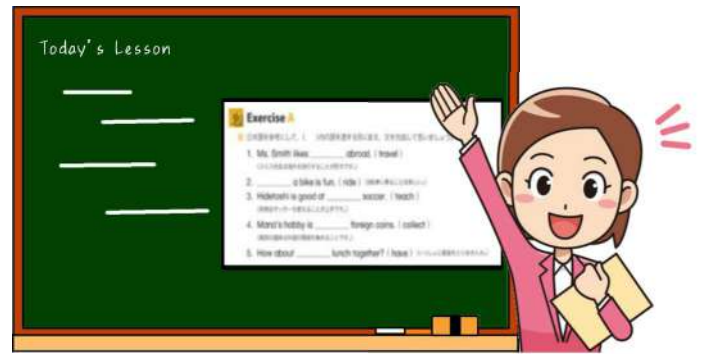




長野県諏訪清陵高等学校 英語科教諭

**北澤 諄子 先生**

人文学部人文学科 平成30年度卒業



私は2019年3月に信州大学人文学部を卒業し、同年4月から諏訪市にある諏訪清陵高校に勤務しています。今年で教員3年目を迎えた新人です。

現在の勤務校には経験豊かな先輩の先生方がたくさんいらっしゃるので、生徒指導から教科指導に至るまで、色々なことを助けていただきながら、なんとか毎日を乗り切っています。

現在は、1学年のホームルーム担任と、1学年全体の英語の指導を担当しています。仕事の内容は多岐に渡ります。担任としての業務だけでなく、1学年の英語指導の方針を同僚の先生方と話し合いながら決めています。部活動に関する業務、校務分掌の業務もありますので、正直言って時間に追われている毎日です。その中で、生徒に関わることは「忙しい」ことを理由に蔑ろにしないことを目指しています。授業の準備や生徒との面談など、生徒に特に直接関わってくる業務には優先して力を入れるよう、努力しています。

教員を目指した出発点は、「誰かの役に立てる仕事がしたい」という気持ちでした。例えば、教科指導においては、英語の苦手な生徒・もっと英語が得意になりたい生徒の役に立てるよう、英作文の添削指導を丁寧に行ったり、授業の中で生徒が英語を使う場面を増やすように努力しています。また生徒指導では、生徒の悩みや考えに出来る限り寄り添うことを目標にしています。私一人が出来ることはごく限られていますし、「自分が生徒のことをすべて理解している」などというおこがましい考えは持ちたくないと思っています。「自分ができる、生徒にとってのベストは何か」ということを考えつづけ、実行できる教員になることが、今の私の目標です。



学部生時代、教職支援センターの先生方には大変お世話になりました。教員のご経験が豊富な先生方がたくさんいらっしゃる所以、教員採用試験の対策講座でご指導いただいた他、教員の業務についてお話を伺ったりできました。また、教職の授業を通して、教員を目指す他学部の学生とも交流できたことは得難い経験となりました。他の人と意見を交換することで、教育に対する自分の考えも練られていきます。教員として働く中で、「ひとりよがりな自分の考えでは、生徒の役に立つことはできない」と日々痛感しています。ぜひ、学部生時代から、教採対策講座や勉強会を利用して、ほかの学生と交流することを楽しんでみてください。

**教職支援センター5～8月の動き**

○長野県総合教育センターとの連携連絡会(5/10)、○長野県教育委員会との連携協議会(5/27)、○教職支援センター拡大打ち合わせ会議(5/28)、○CST養成プログラム実施委員会(6/11)、○教員免許更新支援センター会議(6/18)、○教員免許更新支援センター運営委員会(6/28-7/1【メール審議】)、○教職支援センター運営委員会(6/29)



# 理数系教員（CST）養成事業報告

「平成20年度小学校理科教育実態調査及び中学校理科教師実態調査に関する報告書」で、「小学校の学級担任の約5割が理科指導を、中学校理科教員の約4割が地学分野について「苦手」と感じている」。また、「理科の実験や観察についての知識・技能は、『低い』と感じている割合が小学校教員で約7割、中学校理科教員では約3割」示されたことを受け、(独)科学技術振興機構による理工学系学部の学生を対象としたコア・サイエンス・ティーチャー(CST)養成プログラムの開発事業が平成21年度から始まり、信州大学は長野県教育委員会と連携して、地域の理数教育において中核的な役割を担う理科教員を養成する理数系教員養成事業を平成21年度(2009)から展開しています。

本年度は1年生67名(理学部16名・工学部14名・農学部19名・繊維学部18名)が、CST講座受講にエントリーをしてくれました。前期松本キャンパスでは、中学校で扱う実験を学ぶ基礎講座を火曜日の3、4、5限・金曜日の2限に開講しました。また、昨年度コロナ禍のため、基礎講座が十分に開講できなかつたので、各地キャンパスでも月1回基礎講座を開講しました。

[実施した内容:種の旅を考える飛ぶ種の模型作り、自転車のホイールで重心を体感、モーター作りで学ぶ電磁気、心柱の構造から学ぶ耐震構造、ピンホールカメラ作りで光の進み方を確認、DNA抽出実験など]

臨床学習は、依然としてコロナ禍のため、十分な活動には至っていませんが、山形村の未来塾を中心に学習支援活動を展開しています。

(教職支援センター 学芸員・理数系教員養成支援部門長 小山茂喜)



## 編集後記

コロナ下の授業も2年目を迎え、学生側も教員側もだいぶオンライン授業に慣れつつあります。先日、すべてZOOMの集中講義を終えましたが、皆さんお互いの意見に耳を傾け、考えを深めている様子が窺えました。対面できないなかのように濃い学びができるか、もうしばらく模索の日々が続きそうです。(広報担当 河野桃子)

